第6室（書跡）
「古代インドと日本の古経典」展示解説

N-8-1　梵本心経並びに尊勝陀羅尼（ぼんぽんしんぎょうならびにそんしょうだらに）

ターラ樹の葉を乾燥させ、両端を切り、横に界線の罫（けい）をほどこし、「般若心経」と「仏頂尊勝陀羅尼」を梵字で記した貝葉経（ばいようきょう）です。古代インドでは、紙が定着する以前に、ターラ樹の葉を用いた貝葉写本が盛行しました。この貝葉経は、最も古い部類に属するものとして重要視されます。

N-8附属　訳経記（やくきょうき）

江戸・湯島に霊雲寺を開いた真言宗の僧である浄厳（じょうごん、1639～1702）は、悉曇（しったん、梵字・梵語に関する学問）学者として知られ、梵学に優れていました。この訳経記は、元禄7年（1694）に、浄厳が法隆寺伝来の梵字の貝葉経（ばいようきょう）二葉、「般若心経」と「仏頂尊勝陀羅尼」を写しとり、朱点や句義を注記し、あわせてあとがきを書き記したものです。

N-14　仏名経（ぶつみょうきょう）

『仏名経』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号を受け入れて覚えておくことを説いた経典です。この仏名経は過去、現在、未来の３巻に構成され、それぞれ千の仏名をあげています。各巻の奥書により、永治元年（1141）に五師隆慶（ごしりゅうけい）が先師・林幸大師（りんこうたいし）の一周忌を供養し、同時に仏名会（ぶつみょうえ）を催して、この経を施入したことがわかります。

N-11　賢愚経断簡（大聖武）（けんぐきょうだんかん　おおじょうむ）

この写経は、13巻本『賢愚経』巻第五の沙弥守戒自殺品第二十三に相当する断簡です。筆者は聖武天皇と伝えますが自筆ではありません。写経のなかで最も雄大かつ力強い書風で、“大聖武”の異名があります。

N14-1　仏名経（ぶつみょうきょう）

『仏名経』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号を受け入れて覚えておくことを説いた経典で、菩提流支訳の 12 巻本がよく知られています。この仏名経は過去、現在、未来の３巻に構成され、それぞれ千の仏名をあげています。各巻の奥書により、永治元年（1141）に五師隆慶が先師林幸大師の一周忌を供養し、同時に仏名会を催して、この経を施入したことがわかります。

第６室　染織
―白氈と葡萄唐草文錦褥―

今回の染織展示は法隆寺に伝えられた敷物の代表例として「白氈」と「葡萄唐草文錦褥」を紹介します。中央アジアで作られたと考えられる「白氈」やエキゾチックな葡萄唐草文など、これらの作品からは国際色豊かな古代の様相を垣間見ることができます。

N-38-1,2：葡萄唐草文錦褥（ぶどうからくさもんきんじょく）
表裂・裏裂・芯裂
奈良時代・天平勝宝６年(754)

本来これらの褥は、藺草（いぐさ）の筵（むしろ）を麻布で包んで芯として、表に錦を、裏に絞り染めの平絹をあてて仕立てられていました。
流れるように伸びやかな葡萄唐草文は、奈良時代に大変好まれた文様です。なおN-38に用いられた麻布には、天平勝宝６年（754）に常陸の国から納められた調布である旨の墨書銘があります。

N-54-1：白氈（はくせん）
奈良時代・８世紀

氈とは羊毛で作られた敷物で、現在の絨毯（じゅうたん）のようなものです。古代の寺院では僧侶の敷物として用いられ、わが国では法隆寺と正倉院にのみ伝えられました。
羊毛を分厚くならべて水分を与え、これを巻き上げて圧縮させることで、乾いていくうちに毛が絡み合い、一枚の敷物となりました。つまり現在でいうところのフェルトの技法で作られた敷物です。
氈は現在も遊牧民が使用しており、この作品もおそらく中央アジアで作られた後に唐へ至り、そこから海を越え、遣唐使によって伝えられたものと考えられます。一見地味な作品ですが、その背後には古代日本における壮大な国際交流が控えているのです。